



# 「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い ～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～

(2)

## 山本菜穂子

今回は、「青い森のほほえみプロデュース」の中身ができるまで、その産みの苦しみの話からしようと思います。前回、事業提案した話をしました。ベンチャーという仕組みで、知事がOKしたら提案した職員が自らその事業を実施すると。大きな流れはそうなのですが、でも、事はそこまで単純ではなく。実は最初の知事プレゼンで認められると、そこから次は財政課による細かい予算のチェックが入ります。当然、事業の詳細が固まっていなければ予算は組めないですよ。でも、この取組、前例がなくして何かを真似して作るというわけにいかないし。予算がつくかどうか全くわからないうちに講師の依頼もちょっと気が引けるし。……ブツブツ……そう、この事業の詳細が確定したのは実は知事プレゼンが終わって、その後数ヶ月かけて、財政課と予算を詰めながらの同時進行だったのです。3歩進んで2歩下がりがりながら……

### <私の虐待対応原体験 私の持っていた危機感>

「ほほえみ」などというなんとなくつかみ所のない、甘いイメージの

ことばを使っているのに、何だか気楽な思いつきを気楽にやっていたように思われるかもしれません。でも私、結構危機感を持ってこの取組をやりたいと思っていたのです。

児童虐待の防止等に関する法律が施行される何年も前、アセスメントの整備などなかったまだ手探りの頃。当時児童福祉司だった私が、通告により虐待を受けた子どもの保護に向かったとき（当時はまだ複数体制で面接するという仕組みもなく）、学校で面接した小学校中学年の少女は「今自分が児童相談所に行けば、両親を裏切ることになるから行かない」と言いました。でも体には新旧入り交じった傷や痣とタバコを押しつけられた火傷の跡。どうしてもこの子を今は家に帰せないと思いました。彼女は「もういい子になると約束したから大丈夫」と執拗に繰り返します。

その場の1対1は、大人と子どもではなく、児童相談所職員と小学生でもなく、そんな社会的な立場や肩書きなど吹き飛ばした人間対人間の対峙だったと今もそんな感覚で思い出されます。「私ね、お父さんとお母

さんもあなたを傷つけないんだと思うの、本当は。あなたが児童相談所に来てくれたら、お父さんとお母さんにも児童相談所に来てもらってお話をする事ができる。お父さんとお母さんを助けるためにもあなたに児童相談所に来て欲しい。」と伝えました。それは、その場で私が彼女の話の聞きながら本気で切実に思ったことでした。彼女はすることばに飛びつくように「じゃあ、一緒に行く」と言いました。

私は、約束を守りたいと思いました。人間対人間としての想いを感じていましたから。両親との面接で、あなた達の行いは虐待であると伝えた後は、困惑し怒りもあらわにする両親に「やり方を変えてほしい。そのために協力したい。敵じゃない、味方になりたい。」と伝え続けました。両親も苦しい生育歴を背負っていました。数週、数ヶ月かけて徐々にそんな話を聞かせてもらえるようになりました。

児童養護施設に入所することになった彼女は、両親から捨てられてしまう恐怖にとまどい、両親の下へ戻せと激しくぶつかってくることを繰り返しながら徐々に自分に向き合えるようになりました。

そして、面会、外出、外泊を体験しながら数年後、彼女を両親のもとに戻すことにしました。すぐに虐待関係が再燃するとは考えなかったものの、完全に安心だったから戻したわけではありませんでした。母は彼女の理解者になりましたが、父との

関係は難しいものでした。でも、ずっと彼女と寄り添ってきた児童心理司も私も、彼女を一度家に戻すことが必要だと感じていました。児相に無理矢理変えられた人生を彼女は受け入れることができずにいました。何度も彼女と両親と話し合いを繰り返し、児童相談所は彼女を家に戻す決定をしました。そこからさらに数年後、彼女はもう一度父とトラブルになり、今度は自ら児童相談所に保護を求め、もう両親と一緒に生活には自ら見切りをつけて自立していくこととなります。戻したことが失敗だったとは思っていません。(彼女自身も後にそう話してくれました。)彼女が自分の人生を自分のものとして自らの意志で決定して生きていく、そのための過程だったと思っています。そして当時、まだ虐待件数が少なく、数年をかけ丁寧に寄り添うことができていた私たちには、どこかで、きっと彼女は危なくなれば児童相談所に来てくれるという確信めいた感覚があった気がします。そして実際その時、彼女の中に、支えてくれる人、場所として「児童相談所」があったことがせめても幸せだと思いました。

荒っぽいおおざっぱな紹介ですが、私の虐待対応の原体験はそこにあります。

だから、失敗をさせないことが最も重要なのではなく、保護者にも児童にも、できればもっともっと傷の浅いうちにやり直しをさせてあげられたり、安心して失敗させてあげられ

る環境が欲しいと思うのです。そのためには気軽にSOSを出させてあげられる地域がほしい。それは「責める」という基本姿勢からは始まらないという気がするのです。

そうそう、当時団さんに「虐待という嵐がいつまで続くのかわからないけれど、児童相談所がそれに流されて、これまで培ってきた本来の姿を見失ったら、嵐が去ったとき、児童相談所には何も残らなくなる」というようなことを言われた記憶があります。本当に私は素直なので、虐待だって支援姿勢で何が悪い！って意固地なくらい思っていました。チェックを甘くするというのではなく、姿勢として子どもをとりまく家族の支援をしたいのだとそれを貫くことがとても大事だと思っていました。その姿勢で、上述したお父さんお母さんも、別な家族もつながってくれたじゃない、と。今もそう思っています。もちろん、今はアセスメントをちゃんとしますけどね。

#### <どんな地域に住みたいか>

虐待の早期発見のために、通告義務を周知し、地域でチェックする機能を持たせることに反対するつもりは毛頭ありません。それによって重大な結果を防げることは多々あると思います。でも、“それだけ”を強めていった時、それによって創られる地域に、「私は住みたくない」と思う気持ちが私の中には確かにあります。

実は、既に大学生となった我が家の長男は夜泣きが激しくて、0才から2才まで1年以上に渡り、夜中に泣き出せば2時間は泣きやまないという“毎日”を送っていました。（だから当時、私はスマートだった！！？誰も知らないから書ける？）集合住宅に住んでいた頃は近所に迷惑で、泣き出せば車に乗せて夜中にドライブを繰り返しました。家を建て、夫の両親と同居して、周囲は畑だし（家もあるけど！）やれやれと思ったのもつかの間、今度は新しい家族が音を上げ、叩けば静かになるんじゃないかと言われる始末。無理もありません。本当に激しかったので。息子は、環境が変わったことによる私の緊張を感じていたのかもしれない。あれが今だったら、完全に通告されていたでしょう。「安心して子どもを泣かせられる幸せ。」そんな言い方変だけど、でも、当時私はそれが欲しいと思っていました。だって、この子は泣くことで私に不安を訴えている。だったら、私はそこから逃げないよ。いくらでも泣いていいよ、付き合うから。そんなことをこの子に伝えたいと思っていました。それが正しかったかどうかわかりません。でも、それを「虐待だ」と近所から通告されて、もし、決めつけられたら、苦しいな～本当にこの子を嫌いになってしまうかもって思う気持ちがあるのです。それよりだったら、話を聞いてくれて、頑張っているんだね、と言ってくれる人がご近所さんの方がずっと気持ちが

いいな、当時の私が楽になれるなど思えるのです。

地域からの通告をお願いする一方で“チェックでない地域”づくりを進めることでバランスをとりたい。そうじゃないと、住みたくない地域ができあがってからは遅いんじゃないか。もしかしたら、もう間に合わないかもしれないけれど。始めてみなければ。今、児童相談所に身を置いていない自分だからこそできることかもしれない。当時そんな風に思っていました。

#### <高柳先生との出会い>

実はこの取組、最初は団さんとやろうと思っていたのですよ。でも、断られました。当時丁寧なお手紙をくださって、自分には今、別なことがある。これ以上手を広げることは今はしたくないからと。これも神が仕組んだことかもしれません。こうやって相談していたので、ここから先、この取組を創り上げていく過程の中で、私は何度も団さんに相談し助言をもらうことができました。

そして、団さんとは別の、この取組の成功には欠かせない方と出会うことになります。

それが、当時、日本医科大学の准教授だった、現在「笑医塾」塾長の高柳和江先生です。

私が高柳先生のことを初めて知ったのは、事業提案からさかのぼること約1年、「笑い療法士」という資格認定について書かれた新聞記事でし



三村申吾知事と高柳和江先生 (H19. 3. 23)

た。病気を抱えた患者さんの自己免疫力を高めると同時に、自分らしく笑顔でいられるように働きかけをしてくれる医師や看護師などの医療従事者、患者さんの家族などを「笑い療法士」として資格認定するという取り組みが始まっているという記事でした。誰かの失敗をあげつらい、さげすむことによって笑うのではなく、辛い人が笑顔になれる、そんな取り組みに興味を覚えました。

そして、「青い森のほほえみプロデュース事業」を提案することになったとき、この記事のことを思い出したのです。県民に「ほほえむこと、笑うことの効果」や、「ほほえみや笑いを引き出す方法」を伝えるためには、まず、私たちがそのことをしっかりと学ぶ必要があります。誰かをバカにしたり叩いたり落としたりする笑いではなく、「心が温かくなる笑い」です。元気な人が楽しめる、俗に言う“お笑い”ではなく、しんどい人が笑顔になれる「心からのほほえみ・笑い」です。是非、「笑い療法士」の資格認定を手がけていらっ

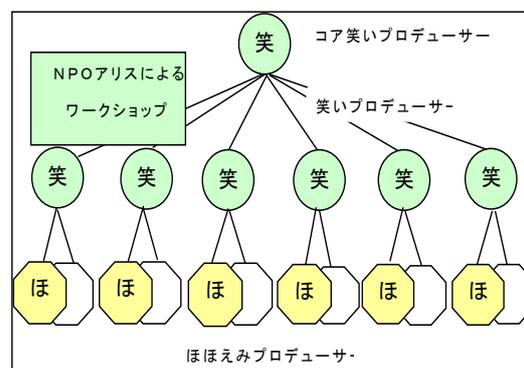
しゃる高柳和江先生に、指導をお願いしたいと思ったのです。

知事プレゼン後の平成18年11月、私は、先生が実施していた「笑い療法士」の資格認定講習に参加し、同時に先生に事業に込めた想いを聞いていただくことから始めました。そして、数回のアプローチの末、もともと、子どもの虐待防止にも深い想いを持っていた高柳先生から、当事業に御協力いただけるとの、嬉しい返事をいただくことができました。そして、そこからやっと、平成19年4月の本格始動に向けて、事業内容の検討を進めていくことになったのです。先生は、言われるまま単純に講師を引き受けるといような関わり方でなく、この事業のコーディネーターの感覚で深く関わってくださいました。そこで私たちはもともとの想いを丁寧に伝え、その後は、先生が具体的にどんな方法で「ほほえみの地域づくり」を進めるかの組み立てをしてくださいました。先生から多くの御提案をいただき、実行可能な方法を検討し、まさに二人三脚で、人材養成の仕組みや方法など、この事業の基本の形を作り上げていきました。

初めて先生からプログラムの内容を説明していただいたとき、シンプルでありながらとても練り込まれたものが展開していることに、感動したのを覚えています。これなら、本当に地域が動くのかもしれないと思えました。私たちさえ必死で頑張れば、ですが。

### <人材養成のしくみ>

さて、下記が高柳先生考案のほほえみの人材養成システムです。誰ですか、「ネズミ講！」と言うのは(^\_^;)



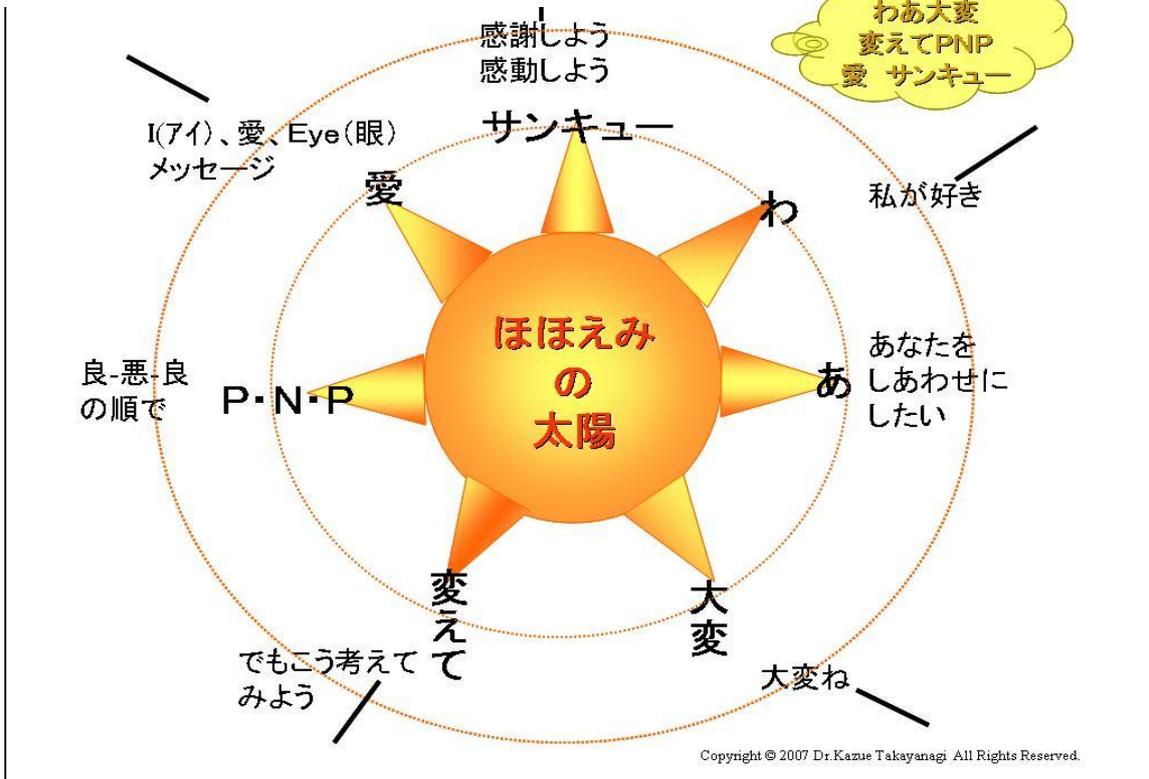
三層構造により、県民の中に、自らがほほえみ、周囲の人からほほえみを引き出せる知識と技術を習得した人材を養成していきます。三層目の「ほほえみプロデューサー」(日常生活の中で、周囲の人からほほえみを引き出してくださる方)を数多く養成することが、最終の目的です。そして、そのほほえみプロデューサーの養成講習の講師として、まず、コア笑いプロデューサーと、笑いプロデューサーを事業推進役として養成していくという仕組みです。

### <ほほえみの7か条>

講習で伝える内容は、自らがほほえみ、周囲からほほえみを引き出すための7つのポイント。これが高柳先生が考案してくださった「ほほえみ太陽メッセージ7か条(通称:ほほえみの7か条)」です。

この「ほほえみの7か条」を、コア笑いプロデューサーと笑いプロデューサーがチームを組んで、約1時

ほほえみ太陽メッセージ7か条



間の講習会で伝えます。

講習はワークショップ形式で、参加者の体験コーナーがあったり、講師の体験談で伝えたり、寸劇で紹介したり。

そして、このほほえみの7か条を日常生活の中で実践してくださるよう、お願いしています。

「ほほえみの7か条」の概要は以下のとおりです。

- 第1条 私が好き
- 第2条 あなたを幸せにしたい

自らほほえみ、そして周囲からほほえみを引き出すための基本の姿勢についてお伝えします。自分自身のことを「好きだな」「まんざら悪くないぞ」と思える状態であることが、

自らあたたかいほほえみを発信していくために、とても大切なことです。そんな自分自身でいたいですし、周囲の方にもそんな状態になってもらうために、お互いのよいところを認め合いましょう。まず、そこから始めてみませんか。それがどんなに人を笑顔にするか、体験していただきます。

- 第3条 大変
- 第4条 変えて

苦しい状況にあるから笑顔になれない、という話はよく聞きます。では、つらい状況にある人がほほえむためには、何が必要なのでしょうか。自らが苦しい状況にあるとき、それは抱え込まずに、聞いてくれる人のそばに行ってお話ししましょう。あなた

に、つらさを話してくれる人がいたら、相手のつらさを否定せずに、まずはしっかり受けとめましょう。そして物事を前向きにとらえられるように、こう考えてみたら、と発想を転換できたら、もっと素敵ですね。講師の体験談や寸劇を使って伝えます。

### 第5条 P・N・P

### 第6条 I(アイ)・愛・Eye(眼)メッセージ

相手に伝えたい苦言、それを伝えた途端、けんかになってしまうということはありませんか。相手への苦言をきちんと伝えて、それでもけんかにならず、相手が笑顔でいられる会話法についてお伝えします。相手への苦言（ネガティブな表現：N）は相手が嬉しくなるようなことば（ポジティブな表現：P）でサンドイッチしてみませんか。そしてもう一つ「おまえは」「おまえは」と指示するよりは、「私」を主語にして自分の気持ちを伝えてみませんか。言われたときの気持ちの違いを体験してもらいます。

### 第7条 サンキュー

自らほほえみ、周囲にほほえみを感染させる「ありがとう」の威力についてあらためて考えましょう。

ほほえみの7か条と、人材養成の仕組みがこの形だったからこの事業はうまくいくことになったのだと思うのです。それはまた、講習活動が続ける中での感想等を通じてお伝えできるかと思えます。

### <天才との付き合い方>

私は最初、高柳先生とどのように関係を持っていったらいいのかとまどっていました。

とにかく、様々なアイデアが浮かぶのです。次々と。先生は、この事業を成功させたいと思っていましたし、どれもそのために必要なこととして考えられたことでした。しかし、県事業として予算の採れるものも採れないものもあり、また、県民性を考えた時に先生のアイデアが目指す効果を生み出すかどうか危惧されるものもあり、そのアイデアを全て採用することはなかなか難しいという状況がここから4年間に渡りたびたび出てくることになります。それは難しいと話しても、必要です、とされる押しの強さ、でも・・・という中で、不必要に競合して、擦り減っていくような感覚。どこまで一緒にやれるのだろうかと前途に不安を覚えることもありました。

そんなとき、団さんに話をしたことがあります。団さんは、高柳先生について私から聞きながら、「一流の女優さんとして処すること」とヒントをくれました。私の中では、それですいぶんと腑に落ちました。そうなのです。つまり、先生は天才なのです。天才と一緒に進むのは難しいのですよね。率直な要求が、単に妥協を許さない強引さに思えたり。でも、今考えると、そんな人が主導しない限りこの仕組みはできあがらな

かったのです。その天才の確信に満ちた強引なくらいの計画がなければ、私ひとりでは県民3万人を巻き込むようなムーブはつくれなかった。私よりも自信家で、天才の意見を真っ向から否定してかかれる人間だったらこれもうまくいかなかった。この方が天才だと気付かせてもらったので、私の中では、先生との距離感がつかめてきました。きっと先生の言う通りに実践できたらうまくいく。競合するのではなく、先生への尊敬と信頼を基礎として、まずは先生に私たちを信用してもらえよう努力しよう。そして先生のアイデアを全て実現することは難しくても、私が、青森県で受け入れられやすいように環境を整えながら実現していく。そうやって一緒に進んでいくことを先生にわかってもらおう、そんな感覚が私の中にすっとと落ちてきました。

例えば、コア笑いプロデューサーの4泊5日の講習会、笑いプロデューサーの3日間日帰りの講習会。青森県民を知っている私には、本当にそんな日程的に過酷な講習会に人が集まると思えず。何とかもっと楽な形にできないかと思ったのですが、先生は内容重視です。そこは譲ってくれません。無理だと言ってしまうこともできたかもしれませんが、でも、きっとこれが必要不可欠なのだろう、信じてついて行ってみよう、やれるだけのことをやってみよう。では、人が来てくれるように広報の方法を工夫してみるか、そうだ、事前に講

演会を開催して機運の醸成を図ってみるか、と。

そして、その分を含め、予算組みを行っていくわけです。

さあ、先生のアイデアは次々とふくらみ、検討を繰り返し、財政課に謝りながらいろいろと変更しながら事業を形にしていきました。結局、形があらかた落ち着いたと思えたのは、年が改まる頃でした。

### <そして予算獲得へ>

さあ、今度は財政課で予算の精査を受けながら事業をシェイプアップしていきます。時に事業の必要性などの「そもそも論」も繰り返されながら、財政主幹査定、財政課長査定、総務部長査定を経て、2月には再度知事に判断を仰ぐ機会が訪れるのです。事業として認めがたいと判断されれば途中でおしまいです。日々新たな宿題を出され、新たな説明文書を作り、議論を重ねていきます。

途中で落とされず、何とか知事査定まで残り、知事が私の顔を見て、「お、これだよこれ、『ほほえみ』。ちゃんとここまで残ってきたな。」と笑顔になったとき、これまで四苦八苦ししながら一緒にこの事業のシェイプアップをしてくれた財政課の担当がやっと笑顔になってくれました。それが私にはとても嬉しいことでした。

### <初代ほほえみ隊の完成>

こうして予算がつけました。

ここまで進んできましたが、この

過程で、部内での青い森のほほえみプロデュースの事業の前評判は決して良かったわけではありません。何だか、奇をてらったプレゼンが評価されて事業化はされるらしいけど、何だかお笑いの人材を創るのだそう。それが県でやるべき事なんだろうか。そんなことで虐待が減ると言うのか？虐待加害者がお笑いの勉強に来るのか？突拍子もない事業だ、効果はない。という感じでしょうか。

面と向かって「なんだか変なことを始めるんだって」と声をかけられたり。ちゃんとしたことを何も知らないくせに、聞きもしないくせに、なぜそんなことを、と悔しい思いをしたり、でも、もともとそんな風に声をかけてくる人は、真剣に関心を持っている人ではなく。そう、こちらがそんな一言一言に傷ついているとも知らずに軽く挨拶程度に声をかけているだけなのです。もともと初めての取組で先行きに何の自信もない私たちですから、毎日のように聞かされるその声には結構ダメージを受けていました。そんなとき、ここまで一緒に進めてきてくれたSさんは必ず味方になってくれました。Sさんは、ベンチャーを本格的に組み立てるとなったときに、課長が課内から異動させてくれた助っ人です。児童相談所経験もあり、頭の切れる才媛です。でも、彼女もこの作業に急に駆り出され嫌な思いもしたと思うのに、私には一切そんなそぶりを見せないでくれました。そして、菜穂子さんはすごいよ、と言いつけて

くれました。そんな人が身近にいてくれることがどれだけ力になったか。

それは、この事業が本格的にスタートしたあともずっと続きます。

さあ、では次の試練を御紹介しましょう。

事業組み立てに半年近く一緒に駆け回ってくれた課長代理もグループリーダーも、事業開始となる4月に全員異動になりました。行政ですものね、まあ、そういう巡り合わせもあるでしょうが・・・当然、見捨てられた気分で、とても心細く。

実は、ベンチャーでは人もそのために手当てしてくれる約束です。私とSさんは、もう1人人員を要求。3名のほほえみプロデュース事業担当が誕生することになりました。もう一人も児童相談所経験者、私ともSさんとも昔一緒に仕事をしたことがある気心の知れた男性、Oさんでした。私たちは、こどもみらい課子育て支援グループの中に青い森のほほえみプロデュース担当として3名で配属になりました。そしてそこに新たにやってきたグループリーダーは、健康福祉政策課から来た、行政マンを絵にかいたような、笑顔をほとんど見たことのない、ほほえみとは最も遠い所にいるように見える人でした。

私とSさんはその人事にたいへんなショックを受けました。でも、ここで私がショックを受けたと言っているのは前に進めなくなる。私はSさ

んに「私たちが進めようとしているのはほほえみづくり。事業の成功を占う一番適切なバロメーターが近くに来てくれたということだよ。Kリーダーを笑顔にできないくらいならこの事業が成功するはずもないということだよ。チャレンジだね。♪」と。自分たちを奮い立たせるように、そんな密約が交わされていたことをリーダーは知らない。今、これを見て始めて知るのかもしれない。(まずい。予め言っておこうか？ま、いいか。)

でも、そんな心配をよそに、実のところ、Kリーダーは私たちがずっと苦しめられてきたような事業への揶揄を一切口にしないどころか、この事業に対して、外側にいるという態度ではなく、まったく一緒に歩む立場として内側にいてくれました。心細かった私たちにとってそれがどれだけ大きな支えだったか。数ヶ月後、私たちのリーダーは、(時折)素敵な笑顔を見せる最も強力な味方になってくれていました。

(私たちがやったこと？それはもちろんほほえみの7か条の実践でしょう。。。ホホホ)

まず、身近なチームを固めること、それが風当たりも強い新規の事業を進めていくときの最重要ポイントと言っても過言でないと私は思っています。

そこがうまくいったことも、奇跡かもしれない。ううん、奇跡だけでなく、実は努力や工夫もあったと思っています。そこはまたいつか改

めて。